

伊達 政宗 — 仙台藩を豊かな地に —

政宗は戦国時代に生まれました。当時は織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった人物が天下統一をなしとげようとして、日本各地で戦が絶えない時代でした。東北の大名伊達家の長男として生まれた政宗も、当時の大名たちがそうであったように、領地を広げ天下を取りたいと願いました。それが政宗の夢でした。

政宗は十五歳で初めて戦を体験して大いに手柄を立て、わずか十八歳で伊達家の当主となりました。その後も各地で激戦を繰り広げました。常陸(現在の茨城県)の有力な大名である佐竹氏などの大軍と戦った「人取橋の戦い」では、多数の敵を相手に政宗も自ら戦いに加わるなど、苦戦の末、何とかもちこたえて伊達の名を挙げました。続いて、最大のライバルである会津の蘆名氏との決戦となった「摺上原の戦い」では、激しい攻防の末に、蘆名氏を攻め滅ぼしました。さらに間を置かず二階堂氏も倒し、ついに政宗は、現在の山形県と宮城県南部、福島県の大半を領地とする東北一の有力な大名となったのです。政宗は全国にその名を広く知られることとなりました。このとき政宗はまだ二十三歳、その目は天下を見つめ、夢は大きく広がっていきました。

しかし、そのころ、時代は大きく動いていました。すでに豊臣秀吉が全国の大半の大名をしたがえ、天下統一まであと一歩と迫っていました。秀吉にしたがっていない有力な大名は、関東の北条氏と奥州(東北地方)の伊達氏ぐらいでした。しばらくして、政宗に秀吉から書状が届きました。「北条氏を攻めるので、伊達家は豊臣家の家臣として私にしたがうように」とのことでした。(豊臣秀吉は強大だ、戦って勝てる相手であろうか。だが、ここで秀吉に屈したら自分の



伊達 政宗 騎馬像

手柄：
功績をあげること。

当主：
主(あるじ)。

豊臣秀吉：
織田信長の家臣で、
信長の死後、天下
統一を果たしました。
書状：
正式な手紙や文書。

夢はどうなる) 秀吉と戦うべきか、それともしたがうべきか。政宗は書状を固く握りしめ口を真一文字に結び、静かに目を閉じました。何日も悩み続けました。そして、ついに政宗は伊達家を守るために秀吉にしたがうことにしました。

こうして伊達家は生き残ったものの、政宗は領地としていた福島県の大半を没収されました。さらにその後、生まれ故郷の山形県南部を取り上げられ、宮城県みやぎけんの岩出山いわでやまや大崎おほさき、名取なとり、亘理わたりなどの地域を代わりにあたえられて、現在の宮城県みやぎけんのほぼ一国と岩手県いわてけんや福島県ふくしまけんの一部を領地とすることになりました。けれども、新たな領地には荒地も多く、豊かな土地を奪われたと同じでした。

それでも、政宗は「奥州に伊達政宗あり」を天下に示そうとの強い気持ちを持ち続けました。秀吉の命令で京(京都)に上ったときの伊達軍は、濃紺のうこんの布地に金色こんじきの日の丸の旗を高く立て、騎馬武者きばむしゃは黒の鎧よろいと兜かぶとを身につけて金色に輝く太刀たちを腰こしに差し、槍やりを持った武者は金色の陣笠じんがさをかぶって朱塗しゆぬりの太刀たちを腰こしに差すなど、目を見張るものでした。そのはなやかな姿を見た京の人々の間では、「伊達者」として長くうわさになりました。

再び政宗まつむねに天下を目指す機会きかいが訪れたのは、「関ヶ原せきがはらの戦い」のときでした。このころの政宗はまだ三十歳代、多くの有力な大名が年老いている中で飛び抜けた若さです。戦が長引けばチャンスはありません。しかし、「関ヶ原の戦い」はわずか一日で徳川家康の勝利で終わってしまいました。政宗は、

「天は徳川家康を選ばれたか……。これで天下は家康のものになるだろう。我が夢はここで終わりか。」
つぶやくようにそう言うと、ため息をつきました。

その後、政宗は自ら名をつけた仙台城に移り住みました。毎日、仙台城から眼下がんかに広がる町や広瀬川ひろせがわ、太平洋の青い波打ち際せままで続く荒れ地を見渡しているうちに、政宗はしだいに考えこむようになりました。(夢は終わりと思っただが、伊達家は広大な領地を得て目の前に広がっている。これが自分が求めてきた藩の姿、天下ではないか) 政宗は目を閉じ、さらに考えました。

(長年、自分の夢とお家のために突き進んできた。しかし、振り返ってみると藩の様子はどうか。氾濫はんらんを繰り返

没収：
取り上げられること。

濃紺：
濃い青色。

陣笠：
足軽が頭にかぶる三角の笠。

朱塗り：
朱色にぬられていること。

関ヶ原の戦い：
徳川家康と石田三成が全国を二つに分けて争った戦いで勝った家康が天下を握りました。

徳川家康：
江戸幕府を開いた大名で、この後、長く江戸時代が続きました。

仙台城：
現在の青葉城のこと。

氾濫：
川の水があふれ洪水になること。

す広瀬川などの多くの川、目の前に広がる荒れた土地、そこで苦勞して暮らす民の姿。自分がやるべきことは、まだまだあるのではないか。目は再び開かれました。政宗は前を見つめ、小さいがはっきりとした口調で言いました。

「夢が終わったなどと、考え違いをしていたようだ。我が夢は一つだけではない。」

その後の政宗の動きは早いものでした。かつて政宗は、ある僧を招き、国を治めるとはどういうことをたずねたことがありました。そのとき、僧は、

「国づくりとは樹木で山々を埋めることである。」

と答えました。政宗はこの言葉を思い返していました。(樹木で山々を埋めるとはすなわち、山に樹木を植えて川の氾濫を防ぎ、水や水路をしっかりと確保することだ。水を制する治水こそが、我が新たな夢の始まりである)

政宗は本格的に治水工事に取っかかりました。川村孫兵衛重吉という優秀な技術者も得ました。生活に必要な水の町のどこからでも取り入れることができるように、川の上流から水を引き町に水路を作りました。水は高いところから低いところへ流れるので、水路にはいつも水が流れるようになりました。この用水が、城下町仙台を流れる四ツ谷用水と呼ばれるものでした。

政宗はさらに、川の流れる道筋を変える大工事を行うよう命じました。この事業はその後も引きつがれ、政宗の跡をついだ藩主は、河口に大きな船も入ることのできる港を作らせたり、石巻から松島湾を通って阿武隈川の河口まで続く運河を作らせました。その結果、海が荒れても船が安心して荷物を運ぶことができるようになりました。また、少ない人手でも一度に大量に米を船で運ぶことができるようになり、その米を江戸(東京)に運んで売ることができるようになりました。政宗の先見の明は、後の仙台藩の発展につながっていったのです。

また、政宗は防風林を作ることにも命じました。各地から良質の松や杉の苗木を取り寄せ、植林も行いました。松林や杉の林は水源の保護にもつながり、成長した木々は建築材料として江戸に運ばれることで、藩の貴重な資金になりました。さらに、政宗は仙台城下の道を碁盤の目のように作り直しました。これは城を敵から守るため、簡単には城にたどり着けないよう複雑な道を作るのが当たり前だった当時の城下町としては、とても考えにくいことでした。

民：
藩の人々。

僧：
この僧は曾洞宗三
国山洞仙寺(石巻
市)住職・良悦と
伝えられています。

運河：
この運河は現在、
貞山運河(貞山堀)
と呼ばれています。

先見の明：
先を見通す力、
能力。

しかし、商工業の発展のためには、まっすぐに便利な道はとても助けになるものでした。すでに政宗の目には戦などではなく、もっと別の大きな夢が見えていたのでしょう。城の町や村の姿はこうして大きく変わっていったのです。

現在、宮城県は米所として全国的に有名になりました。広瀬川の流れと美しい風景は人々の心をなごませ、「杜の都」仙台市にはけやきが立ち並び、青葉祭りや七夕祭りには毎年多くの人が宮城県を訪れています。今の宮城県の基礎を作ったのは、まぎれもなく伊達政宗です。政宗の夢は大きく開き、実を結んだのでした。

伊達政宗はこの他、味噌づくりにも奨励しました。戦のときの食糧として味噌が重宝されたこの時代、気温が高く暑い夏でも仙台藩の味噌は味が良い上に変質しないと評判でした。政宗は、城下町と江戸の伊達藩領内にそれぞれ大規模な味噌づくりのための施設を建てました。その場所（仙台市青葉区川内大工町 仙台第二高等学校正門横）には現在石碑が建てられています。石碑には「仙台みそは藩祖伊達政宗公が城下花壇に御塩噌蔵を設け（中略）後に江戸市中でも一般にはらい下げられ、仙台みその名が広まった」とあります。



仙台みそ発祥の地 石碑

伊達政宗

伊達政宗は、永禄十（一五六七）年、米沢城主伊達輝宗の長男として生まれた。十七歳で伊達家十七代の当主となった。政宗は戦国時代を力強く生きぬいて、仙台城（青葉城）を築き、ついには仙台藩六十二万石の初代藩主となった。その勇壮な戦いぶり、幼少時代にわづらったほうそう（天然痘）により片目を失明したことから、後に「独眼竜」と呼ばれた。